図書館だより

第15号
昭和58年3月25日
愛媛大学附属図書館

目　次

○図書館を考える⑤……1～5
○The British Libraryの General Catalogue of Printed Books の購入目的と意義について……6
○愛媛大学附属図書館委員会報告……7
○閲覧業務の電算化処理に伴う利用手続きの変更について……7
○お知らせ……8

図書館を考える……⑤

＜座談会＞

図書館を語る

―人文・社会科学系図書館委員―

ひと：法文学部（国文学）美山　靖　　教育学部（国文学）白方　勝
法文学部（日本史学）福本　茂雄　　教育学部（教育史）影山　昇
附属図書館長　星島　一夫　　事務部長　小河　清
とき：昭和58年1月31日　　ところ：館長室

館長　本日は、どうもお忙しいところご足労いただき、ありがとうございます。『図書館だより』の連載で「図書館を考える」というシリーズで座談会を行っています。自然科学系の先生方と人文・社会科学系の先生方とでは考え方に違いがあったりして、話がかみ合いにくいこともあるのではないかと考え、今回は人文・社会科学系の図書館委員の方々に集まっていただきました。そして、次回には自然科学系の図書館委員の方々との座談会を企画しています。２つの座談会が終った後で、考え方のどこがどのように違いがあるのか、総合的に検討していきたいと考えています。

○学術雑誌の集中化について

——図書館でコピーサービスも——

館長　まず、先日の図書館委員会でも議題に出ました学術雑誌の集中化の問題あたりから話していただければと思います。今年度中には図書館の建物も改装される見通しです。その際、先生方の閲覧室を設けたいと考えていますが、めぼしい学術雑誌もないというのでは淋しいので、図書館にバックナンバーなども置いて、先生方の利用に供したいと考えています。そうすれば、先生方にも足しげく図書館に来ていただけ、図書館としても先生方と密着しながら発展していけるようになるのではないかと思います。今の図書館は、研究者にとって距離が遠く、その距離をなんとかして近づけたいということもあって、学術雑誌の集中化を提案した次第です。人文・社会科学系では、分野によって違いがありましょうが、自然科学系ほどには重複は少ないと想像されます。国文学関係ではどうですか。

白方　教養部のことはわかりませんが、法文学部と教育学部の国文学関係では、主な雑誌はそれぞれ買って研究室に備えつけているので、重複していると思われます。各大学及び研究室等で発行している雑誌も、それぞれの研究室に送って来ているようです。2部あれば、紛失や破損の場合には補充できて結構なのですが、費用的には無駄になります。

館長　各学会や研究室からの寄贈の場合は、図書館を通じてですか、それとも研究室に直接ですか。

白方　研究室宛に直接寄贈されてきます。

美山　人文科学系の場合、購入雑誌が全体の雑誌の中で占める割合が、自然科学系の方で問題になっている雑誌の重複に比べればパーセンテージは低いと思えるのです。ですから、雑誌の集中化を考える場合、購入費用が節約できるのではないかというのは消極的な観点であり、利用者から見て、研究室にある資料が図書館という公的な場所に公開されることが積極的な観点だと思います。ただ節約面というのは、我々の方からするとそう響かないのではないかという気がします。

白方　図書館に置くと管理はきちんとやってもらえると思うのです。我々の方に置いておきますと、製本もしなくて、行方不明になったりする雑誌が出て来たりします。また、各大学から送ってくる雑誌にしても、図書館宛に1冊だけ送るように発送方法を指定して来る大学も出て来ています。このような点からすると、図書館に管理してもらうのが管理面では一番良いのではないか、と思います。ただ利用の便を考えると、費用の面からだけで集中化を考えるわけにはいきません。図書館の方でも、運用面・コピーサービスなどの便がはかられるべきだと思います。

美山　我々のところでは、単なる雑誌の受入目録ではなく、論文の内容を検討してカードを取っています。自然科学系の場合と少しちがって、実際に論文の内容を見ないと何を問題にしているのかわからないこともあります。雑誌が図書館に集中化された場合、これまで蓄積して来たこの作業をどうするかという問題もあります。

館長　教育学関係では、どうですか。

影山　教育学部の構成自体が、人文・社会・自然といった多様な学科目からなり、図書の方での重複はあっても、雑誌については、学部内での重複は少ないと思えます。教職関係では、他学部と関連している心理学関係などに少しの重複はあるでしょうけれど。ただ、学術雑誌の集中化が実現しますと、総合大学としての愛媛大学のメリットが、この集中化に反映して来て、自分たちだけの教室の枠をこえて、様々な学術関係の文献を目にすることが出来て、メリットは非常に大きいという指摘はできると思うのです。雑誌の利用状況によっては重複もやむを得ないこともしばしばあり、すべて一律に集中化するのは難しいでしょうが、集中化の方向で、出来るところから集中化を進めていくのではどうでしょうか。集中化のメリットが大学の関係者に理解されていけば、集中化のスピードも速まっていきますし、デメリットが出てくれば、逆のコースとなってくるでしょう。狭いキャンパスの中ですから、活動の拠点

が研究室なら、情報を集約した拠点としての図書館の機能がもっと考えられてもよいですね。デメリットよりメリットの方が大きいのではないかという気が致します。

館長　私の専攻の経済学の方でも、経済学だけをやっていたのではどうにもならなくて、社会学や哲学などの隣接領域の論文を読まねばならないという状況が出て来ています。こういった学際的研究がどんどん必要となって来ています。そういう意味では、一箇所で、多分野の雑誌論文を見ることが出来るということになれば、学際化の社会的要請にも対応できる条件が整うのじゃないかと思えます。歴史学は、特にいろいろな分野の知識を踏まえる必要があるのじゃないですか。

福本　法文学部の日本史学研究室では、『日本史研究』という雑誌を購入していますが、たぶん教養部や教育学部の史学研究室でも購入されていると思うのです。ですが、私の経験した範囲内では、学生はあまりこの雑誌に関心を示さないのです。従って重複するよりも、集中管理で費用が浮けば、それに替わる雑誌を購入する方が、学生にとってはよいかも知れないと考えることがあります。もう少しくだけた口当りのよい雑誌もありますから。大学院でもできれば、少しは話は変わって来ますが、法文学部の文学科のように学部段階ですと、専攻の度合は薄いので、幅の広い雑誌を購入しておく方がよいのではないでしょうか。図書館の雑誌コーナーに歴史学関係の洋雑誌が1点もないのもおかしいですね。松山商科大学の図書館へ参りますと、お隣は集中管理らしいですが、歴史学関係の基本的な洋雑誌があります。私は、時々お隣の大学図書館におじゃまして、目の保養をさせていただいているわけです。難しい問題があるのでしょうけれども、研究室サイドで購入すると、せっかくの予算で買うのだからというわけで、専門にひき寄せて購入することになります。案外基本的な学術雑誌が漏れることも生じるかも知れません。先ほどの洋雑誌がひとつの例です。また、私はロシア語の社会科学とか歴史学関係の雑誌を見たいのですが図書館にはそれも1点もないのです。お隣の大学図書館には何点かあるのです。やはり、集中管理のメリットでしょうか。本学でも、雑誌目録によると、どこかの研究室に、モスクワ大学の研究紀要が入っているのですね。たぶん、この紀要には歴史学関係の論文も載っているのです。この紀要のように各分野にわたっている雑誌は、もし集中管理すれば、いろんな分野の先生方が利用できます。紀要類は、そういう性格があると思います。

美山　学内に対して資料を開くという意義がありますね。

影山　学生の立場に立てば、研究室にある資料というのは、敷居が高いという感じがするようです。メリットとデメリットをいろいろな立場から議論するのも大切ですけれど、協力できるところからスタートするということも必要な気がします。事実が生まれてくれば、教官だけでなく学生も利用できるわけですから、ただ単に議論するだけではなく、事実を通して議論をしていく方が現実的でより望ましいと思えます。

館長　出来るところからでもやっていくというのでなければ、やり方としては、なかなか難かしいことだと思うのです。自然科学系の雑誌の価格が高騰して経費的に困窮化しつつあるという話を聞いたり、重複もかなりある実状からすると、自然科学系の方が集中化をやりやすいと思えたのですが。ただし、建前としては賛成なのだが、実際の話になると、なかなか進展しないのですね。もしかしたら、人文・社会科学系の方が、話が進みやすいのでは、と考えたりもします。

白方　人文系は、比較的に図書館へ足を運びやすいのですね。自然科学系は実験もあり、自分の持ち場を離れ難いこともあると思えるのです。我々としましても、わざわざ図書館までは来たくないというのが本音ですけれど。ですが、雑誌は全部見ることはないわけで、専門の箇所とか必要な箇所をコピーできれば充分です。

影山　私のところにも、いろいろな雑誌が集まっていまして、研究室のスペースの関係もあり、一部はすでに図書館に返却して、必要のつど利用しているわけです。私は、図書館を利用することに抵抗感がないものですから。時代の流れもあり、

管理さえしっかりしていただければ、個人的には委託をお願いしたいと思っています。

○ 集中化に最適の紀要類

福本　購入雑誌だけの集中化ではなく寄贈雑誌も含めて集中管理をしていただけると助かります。

美山　交換までは研究室が行い、結果だけは図書館に廻して利用するというのではどうですか。

白方　学生がレポートや卒論を書くときに、法文学部の学生が教育学部へ雑誌を借りに行き、教育学部の学生が法文学部へ借りに行くというのでは大変ですね。

美山　大学によっては、いくつかの分野を集めて１冊にしている紀要もあるので、自分のところに関係があるからということで取り込んでしまうと他のところには全然廻らないことになります。紀要などは、もともと集中管理に適した雑誌です。

白方　どこまで利用の便と図書館での雑誌の集中管理とが、うまくかみ合うかという点につきると思います。少ない経費といいながらも、重複分を整理し、経費が浮けば、それだけ他の雑誌が買えるわけで、少ない研究費の中では助かるわけです。

福本　余談になるかも知れませんが、松高時代にも、当時の総合雑誌『改造』とか『中央公論』は購入していたと思うのです。しかし、書庫には僅かしか残っていないのです。いまや、それらは日本近代史研究にとっては一級の資料です。おそらくスペースの問題とか、消耗品扱いで気軽に処分したとか、総合雑誌などは学生、教職員が個人で保存するものと考えていたとかが原因だと思います。今でも、あまり発想に違いはないのではないでしょうか。そうしますと、何十年か後には、現在の私どもの対応に驚かされることになりはしないでしょうか。ある程度は玉石混淆でもよいから、ともかく保存していただければありがたいです。

○ 地域に関する資料の収集について

――文化的催しの企画も――

館長　地域研究の資料を図書館で収集しようと考え、少しずつ集めて来たわけです。図書館のひとつの特色として、また、地域に位置し、地域の発展のために大学図書館は何をすればよいのか、という考え方からです。まず、その端緒として、学内の先生方で地域に関する研究論文を執筆すれば、図書館に寄贈していただけないだろうかとお願いして来ました。しかし、なかなか集まらないのですね。この点も含めて、資料を収集し利用に供するという図書館の機能がもっと理解されてしかるべきだとも思えるのですが。まずは愛媛、できれば瀬戸内に関する地域資料を収集したいという理想を持っているのですが、こういうことは、図書館のあり方として時期尚早なのでしょうか。

影山　やはりＰＲの不足があるのではないでしょうか。本年度から、図書館の利用を条件つきで地域の住民にも認め、門戸を開放しましたが、学内からの地域に関する文献のみでなく、広く学外からも地域資料が精力的に収集できればよいですね。そのためには、大学の図書館に対するイメージは公共図書館を利用する以上に、地域住民にとっては敷居が高く手の届かないところにあると思うのです。ですから、地域住民にアッピールするような催しなどの企画があってもよいでしょう。例えば、読書週間などに図書館で企画する文化的な催しなどですね。地域住民に本学の図書館がより深く理解されたときに、はじめて地域住民とのパイプがつながってくるように考えるのですが。

美山　市町村などが発行する資料の情報を早くキャッチして、寄贈をお願いする積極的な努力も必要ですね。

白方　いま、愛媛県史の編集・執筆を行っていまして、編集の過程で集めた資料があります。文学関係では、図書館のスペースが広くなれば、部屋を一室ぐらい確保してもらって、それらの資料も含めて地域文学資料室ぐらい作れないだろうか、と考えています。コピーが主なのですけれど、生の資料も欲しいわけです。そこで、調査に行った時には、附属図書館への寄贈をお願いしたりしています。ＰＲ活動を含めて積極的に収集しようとすれば、かなり集まる余地もあるのではないでしょうか。愛媛大学地域社会総合研究所が有名無実化してきましたので、こういった活動は図書館に移ってきそうな気もします。

○ 図書館委員会のあり方について

館長　図書館委員会のあり方について話し合って

もらったらと思います。今までの図書館委員会が予算の配分を決めるのが主で、どのように図書館を運営していくのかについて話をする会ではなかったという経緯があります。これをどう改革していけばよいか。また、図書館委員会では話が煮つめられないような事態も生じて来ています。例えば、電算化の問題などですが。こういった場合、専門的な委員会も設けて対応していく必要が生じて来ているのではないでしょうか。

白方　我々、図書館委員は選挙で選ばれるわけで、図書館の専門家でも電算機の専門家でもありません。ですから、図書館委員が中心になって、それ以外からそれぞれの専門家を加えて検討していくというのでどうでしょうか。どのような問題まで、そういった委員会を作るかが問題だと思います。組織が煩瑣になれば、かえって動きが取れなくなる恐れもあります。電算化の問題あたりを第一歩として手掛けてみたらどうでしょうか。

影山　専門委員会を固定した組織とするのではなく、問題が生じた時に必要に応じて図書館委員も交えて組織化すればどうでしょうか。そして、問題が解決すれば、自然解消というのでは。委員会をただ存在させることだけでなく、いかに議論を深めるかがより重要だと思います。たしかに、図書館委員会という大所帯では、すべてを解決しがたいことがあります。そういった場合、専門委員会を随時編成し検討を重ね、その結果を図書館委員会で報告し承認を求めていくのではどうでしょうか。本当に必要な問題に関して委員会を作るのであれば、組織的にも比較的動きやすいのではないでしょうか。

白方　図書館は、やろうと思えばやらなければいけない問題が多いのですが、なかなか前に向いて進んで行き難いことも非常に多いのです。従来、建前上は図書館はとても重要で必要なものだと認められながら、人や金をつぎこむのにおろそかであり軽視してきたわけです。

影山　図書館が過去の先人の英知の集積だという認識は皆さん持っておられると思うのです。ところが、いざ重視し人や金をつぎこむことになると比較的冷淡で、そういう現状は是非とも打開していって欲しいと思います。

白方　やはり、目の前のことに追われまして。

福本　私は本学に参って日が浅うございますものですから、不満を持っているのは私だけかと思って、二、三の先生方に伺ってみたのですが、皆さん不満を持っておいでです。絶望しておられます。（笑）ある先生などは、書庫に入ると気分が悪くなるので[5]入らないようにされているとのことです。（笑）たしかに30歳代の先生はとくに不満を持っておられます。図書館が要するに学生の自習室にとどまっているのです。研究体制とは全く無縁の存在が実情ですね。これでは図書館が本来持つべき機能を自ら否定しているにひとしいです。不満や意見をすいあげていく機能を図書館委員会が果さないことには、本当に先生方や院生、学生諸君の期待にはそえないと思います。

館長　一番痛いところなのですが（笑）、研究的機能の充実を考えてはいるわけです。なかなかうまくいかないですね。学術雑誌の集中化もその一環なのです。しかし、いま先生が言われたような先生方の不満なり意見が私のところまで具体的には届いてこないのですね。

美山　人文・社会科学系について言えば、研究費の9割ぐらいは図書館と関係がある訳で、関係の深さに正比例して関心も深いので、不満も出てくるのでしょう。

白方　図書館に配分され、図書館自体で購入できる経費は僅かしかない。従って図書館では資料が揃わない。そこで他の図書館に資料を求めざるを得ない。そうなると、それなりの経費がかかります。いうなれば、悪循環を繰り返しているような気もします。

部長　これまで先生方との縁が薄かったので、何らかの形で親身になって相談いただける先生方との組織が出来るとありがたいと思います。

館長　先生方との距離はそうは言いながらも少しずつは縮まって来ているような気もします。あまり目立ってはいませんが、図書館に対する関心も高まっているような感じもしています。図書館をとりまく状況も変って来ています。附属図書館がどういう役割を果すべきかという意見も、少しずつ出て来ていると聞いています。本日はどうも貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。今後とも、お気づきの点がありましたら聞かせていただきたいと思います。

The British Library（英国図書館）の General Catalogue of Printed Books の購入目的と意義について

谷　川　宗　隆

周知の如く、The British Library（英国図書館）の参考局は、The British Museum（大英博物館）の中にあり、アメリカの議会図書館、フランスの国立図書館、ソ連のレーニン国立図書館と並ぶ世界最大の図書館の一つである。（註1）

「日本の学者とヨーロッパの学者との相異の一つは前提としている図書館の相異である」とよくいわれる。海外留学等でこの様な図書館を利用するとこの言葉の重さを痛切に感じる。それは単に蔵書の規模や深さの相異のみならず、利用する際に受けるサーヴィスにも感じる。専門家としての司書（博士号を持っている人）が多数おり、研究に必要な文献についての助言をしてくれる。研究者にとってこれほど幸福な事は無いであろう。私はここで約10ヵ月間『資本論』が引用している文献や、ウィリアム・ペティについての文献を調査したものであるが、その際、司書に随分と助けてもらった。帰国に際してお礼を述べると、『資本論』に関する匿名著書リストを整理すれば、同図書館に寄贈して下さいと言われ送った。又、調査の際、カタログにおける記載事項の間違いや、本のダメージの状態、例えば1ページ脱落している等、証明し、報告すると、必ず貴方の名前を記録しておきます、Thank you!! であった。

さて、愛媛大学附属図書館に世界最大の図書館と同一の蔵書・サーヴィスを望むのは夢物語であるが、幸いにも英国図書館を本学の図書館において利用することが出来るようになった。すなわち、The British Library の General Catalogue of Printed Books が reprint され、それが本学の図書館（本館）に購入されたのである。残念ながら縮少版であるが、費用の関係上仕方がない。

General Catalogue は本巻263巻と補遺からなる。補遺本は年々新たに蔵書されたものがまずカードで整理され、それが後に総カタログに入れられたものである。又、特殊項目に従って整理されたカタログが出版されている。総カタログはこの図書館独自なものであり、200年の歴史がある。（註2）　これは一覧性があり、それ自身が一つの文献表である。更に、各文献に関連しているSubject については指示があり、これに基づいてより一層の文献研究が可能である。例えば、William Petty の場合、Geoffrey Keynes（経済学者 J. M. Keynes の弟）の A Bibliography of Sir William Petty, F.R.S. and of Observations on the Bills of Mortality, by John Graunt, F.R.S. という文献学的に考察された本があり、これが考察している75冊についてそれぞれ BL（British Library）は複数の冊数を持っており、すべてで約130件程度のマイクロフィルムとなった。文献学の深さもさることながら蔵書の深さに恐ろしさすら感じた。

さて、copy を入手したい場合、幸いにもこの図書館は Photographic Section（コピー・サーヴィス部）を持っているが、その複写技術の優秀さには定評がある。私の経験では注文してから早いもので3ヵ月、遅くなれば半年ぐらいでマイクロフィルムが送られて来ている。なお、1800年からの文献はゼロックスも可能であるが、それ以前のものはすべてマイクロフィルムのみである。

愛媛大学附属図書館の参考調査係に相談されれば、国内はもちろん、海外についても有用な助言が得られるであろう。

註1　『大英博物館』　藤野幸雄著　岩波書店 1975　iiページ参照。同書は如何に大英博物館が生成されたかの考察であり、ことに総カタログ作成の苦闘が述べられている。蔵書約600万冊。年間増加約40万冊。英国における出版物はすべて納入される。

註2　上述書参照。

（法文学部教授・経営学）

附属図書館からの追記

当館の所蔵状況は次のとおりです。

- General catalogue of printed books to 1955. Compact ed. Readex Microprint Corp. 27 vols.
- General catalogue of printed books.
  Ten-year supplement 1956–1965. Compact ed. Readex Microprint Corp. 5 vols.
  Five-year supplement 1966–1970. Compact ed. Readex Microprint Corp. 3 vols.
  Five-year supplement 1971–1975. Compact ed. Readex Books. 2 vols.

次の図書も継続購入中です。ご利用下さい。

- British Library general catalogue of printed books, 1976–1982. K. G. Saur. 50 vols.

なお、BLより複写物を入手する場合、BLLD（British Library Lending Division）を通じて申込みますと2週間ぐらいで入手が可能です。参考調査係にお尋ね下さい。

愛媛大学附属図書館委員会報告

昭和57年度第3回附属図書館委員会

日　時：1月18日（火）　13：00～

議　題

(1) 昭和57年度学生用図書費（第2次）について

整理課長から、資料に基づいて説明があり了承された。

館長から学生用図書の経費をより有効に運用するために、従来の方法を見直してみる必要があるのではないかと思われるので、各委員のご意見をお聞かせ願いたい旨の提案があった。閲覧課長から、小さな購入単位では購入することが困難な高額参考図書及び、全集等の欠巻補充や推薦洩れの学生必読新刊書等の購入のための一定額を、出来れば図書館にプールさせていただきたい旨の説明があり、各委員から種々意見が述べられたが、来年度以降、前向きに検討していくことになった。

(2) 学術雑誌の取扱いについて

館長から、前回の図書館委員会から懸案となっていた外国雑誌の集中管理の問題を一歩前進させるための糸口等について、各委員のご意見をお聞かせ願いたい旨発言があった。これについて、学部を越えて各関係学科で話合いを行い、可能なものから部分的にでも実現していく方向を検討することとなった。

重複状況についても、各教官一人一人に周知していただくようにする等の意見が述べられ、館長から、各委員のご意見を尊重し、少しでも出来るものから実現していく方向で努力したい旨発言があった。

報告事項

(1) 第9回中国四国地区国立大学図書館協議会について

(2) 図書館業務電算化の準備状況について

閲覧業務の電算化処理に伴う利用手続きの変更について

附属図書館では、『図書館だより』第14号でお知らせしましたとおり、昭和58年4月1日から図書の貸出・返却業務をコンピュータで処理することになりました。従って現行の貸出・返却等に関する手続きが下記のとおり変更されますのでお知らせいたします。

○図書館利用証

4月1日からは図書館利用証が必要となります。この図書館利用証は利用者である皆さん方の登録申請に基づいて交付いたします。まだ登録されてない方は、閲覧係カウンターに備付けてある申請書に必要事項を記入して係まで提出してください。

新入生の登録申請受付は4月13日以降になります。詳細については後日図書館の掲示板でお知らせします。

○貸出

開架図書を借り出す時は、図書館利用証と図書を貸出カウンターへ提出してください。また、書庫内図書を借り出す場合は、今までどおり図書館外貸出票に必要事項を記入し、図書館利用証を添えて貸出カウンターへ提出してください。

○返却

従来どおり図書を返却カウンターへ提出し、返却手続きをうけてください。その際図書館利用証の提示は不用です。

○問い合せ・予約

問い合せ業務には、利用者問い合せと図書問い合せがあります。利用者問い合せは、利用者が現在借用している図書の冊数、返却日等の確認ができます。図書問い合せは、利用者が求める図書が貸出中か否かを確認し、貸出中の図書については予約をすることができます。これらの業務については今までよりも迅速なサービスができますので、「図書問い合せ・予約票」に必要事項を記入のうえ係員に提出してください。（閲覧課閲覧係）

お　知　ら　せ

○愛媛大学記念文庫について

昭和57年11月から昭和58年2月までの間にご寄贈いただいた図書は下記のとおりです。

美山　靖
　大海集〔翻刻編〕(愛媛大学古典叢刊 別巻)
　　愛媛大学古典叢刊刊行会　1982
西前　美巳
　テニスン詩の世界　中教出版　1982
三崎　敬之
　マサチュセッツ湾植民地公民の研究
　　大明堂　1983
和田　茂樹
　大海集　下(愛媛大学古典叢刊　18)
　　愛媛大学古典叢刊刊行会　1982
中小路駿逸
　新古今和歌集　3(愛媛大学古典叢刊　27)
　　愛媛大学古典叢刊刊行会　1982

○学生希望図書について

昭和57年4月から同年12月までに購入し利用出来るようになっている学生希望図書は下記のとおりです。

- 電子・通信・電気工学基礎講座　第19巻
　　福島弘毅編　丸善　1974
- 電気実験—電子編—
　　電気学会通信教育会　オーム社　1981
- 電気実験—電機気器・電力編—
　　電気学会通信教育会　オーム社　1981
- 電気実験—基礎・計測編—
　　電気学会通信教育会　オーム社　1982
- 等質空間上の調和解析学
　　岡本清郷著　紀伊國屋書店　1980
- 電気・電子工学実験　第1巻　基礎編
　　山田十一〔等〕著　コロナ社　1977
- 電気・電子工学実験　第3巻　電子・情報工学編　中園　彪〔等〕著　コロナ社　1976
- 教育の根底を支える精神的心意的な諸力
　　R・シュタイナー著　人智学出版社　1981
- ルドルフ・シュタイナー研究　第4号(雑誌)
　　人智学出版社　1981
- 教育の基礎としての一般人間学
　　R・シュタイナー著　人智学出版社　1981
- 地球最大の企業AT&T
　　S・クレインフィールド著　CBS・ソニー出版　1982
- 複刻国定教科書(国民学校期)　ほるぷ　1982
- 司法試験択一問題集
　　東京経済学院出版部　1980
- アインシュタインの宇宙
　　N・コールダー著　みすず書房　1982
- エデンの恐竜—知能の源流をたずねて—
　　C・セーガン著　秀潤社　1982
- 様相論理学入門　G・E・ヒューズ〔等〕著
　　恒星社厚生閣　1981
- 集団システム論
　　H・F・ティラー著　誠信書房　1978
- 古生物学各論　第3巻
　　井尻正二氏還暦記念出版編集委員会編
　　築地書館　1981
- リー群の話　佐武一郎著　日本評論社　1982
- 自由への教育　自由ヴァルドルフ学校連盟編
　　ルドルフ・シュタイナー研究所　1982
- 現代マーケティング論
　　橋本　勲著　新評社　1981
- イエスという男　田川建三著　三一書房　1982
- ディネーセンコレクション　1～4
　　ディネーセン著　晶文社　1981～1982
- 英検1級カセットブック
　　日本英語教育協会編　編所　1982
- 生命科学と宗教　第1巻
　　渡辺　格〔等〕著　佼成出版社　1982
- 臨床心理ケース研究　3～4
　　臨床心理ケース研究編集委員会編　誠信書房　1982
- 一遍上人語録新講　古川雅山著　雅山洞　1979
- 一遍ヨーロッパを行く
　　古川雅山著　雅山洞　1980
- 一遍と空海　古川雅山著　1982
- 先聖先人　竹之内静雄著　新潮社　1982
- 保型形式と整数論
　　土井公二〔等〕著　紀伊國屋書店　1970
- 石鎚　高橋毅写真集
　　高橋　毅〔写〕　学習研究所　1982

愛媛大学附属図書館報「図書館だより」
第15号　昭和58年3月25日発行
発行　愛媛大学附属図書館
松山市文京町3番
Tel 0899—24—7111